

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01638

研究課題名（和文）保健体育科授業におけるアクティブ・ラーニングの理論と実践-知識と言語の視点から-

研究課題名（英文）Theory and Practice of Active Learning in Health and Physical Education Classes:
From the Viewpoint of Knowledge and Language

研究代表者

日高 正博（HIDAKA, Masahiro）

宮崎大学・教育学部・教授

研究者番号：80452853

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アクティブ・ラーニング(以後ALと表記)に基づいた保健体育科授業の在り方について、検討しようとした。

その結果、ALに基づいた保健体育科授業は「問題解決的学習」と「協働学習」のまとまりであるとするモデルを考究した。また、そのモデルに基づいた中学生を対象としたマット運動の授業では、仲間同士の知識の伝達と実践が活性化され、学びの「内化と外化の往還」が確認された。同様のことは小学校中学年でも認められた。さらに、体育理論と実技の授業を関連させる際は、実技の前に体育理論の授業を行った方が適切であることが示唆され、インプットされた知識は実体験を通すことで「智恵」に高まることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、保健体育科授業における「主体的・対話的で深い学び」の生起を企図した授業改善を期待して行われた。すなわち、「主体的・対話的で深い学び」を具現化する方法論として「アクティブ・ラーニング」に焦点を当て、その体育科授業モデルを試案するとともに、そのモデルに基づいたプログラムを作成・実践し、学習成果からモデルの適切性を報告した。中でも、知識の学習と実技の授業の関連性を押さえた授業プログラムは、子ども達の知識のやり取りである言語的対話と体育ならではの実技が有機的に関連し合う学びの姿を浮かび上げ、内化と外化の往還の中で子ども達が自ら学び高め合う「深い学び」が成立していたことを報告できた。

研究成果の概要（英文）：We tried to examine the state of health and physical education classes based on active learning in this study. As a result, we investigated a model in which health and physical education classes based on active learning consist of problem-solving learning and collaborative learning. In addition, the coming and going of internalization and externalization in learning was verified in mat exercise classes based on that model. Furthermore, it was suggested that it was more appropriate to give physical education theory classes before practical skills when associating physical education theory and practical skills classes.

研究分野：体育科教育学

キーワード：アクティブ・ラーニング 保健体育科 体育理論 内化と外化

1. 研究開始当初の背景

著者らは、保健体育科成立の基盤である「身体運動文化」を中核とした総合学習の実践に取り組んできた。すなわち、身体運動文化に内包されている多くの知識や技術(運動)を子どもたちに身体活動を伴ってトータルとして教えようとするプログラムは、子どもの分かりの深まることを報告してきた。

本研究課題は、この研究を発展させるもので、実技と知識の学習を有機的に関連付けたプログラムは、子どもの学習活動を活性化し、今日の教育課題となっているアクティブ・ラーニングを成功に導く一つのプログラムになることを実証しようとした。

「体育理論」は、中学校で年間3時間、高等学校で6時間程度しか配当されておらず、授業を充実させるためにはあまりにも時間が足りないのが実情である。また、体育理論の学習が知識の習得に終始し、実技の授業の中で生きて働いていないことや、体育理論の学習後のスポーツ実践との関連性のないこと等が問題点として指摘される。

本研究課題は、アクティブ・ラーニングを構想しているが、アクティブ・ラーニングの語だけが先行し明らかになっていない点も多い。保健体育科においてもアクティブ・ラーニングを採用し成功させるためには、導入することの積極的意義や成功のための条件等について検討する必要があることを示唆している。

ところで、アクティブ・ラーニングの先進的研究に取り組み関連書籍の多い溝上は、言語活動とアクティブ・ラーニングはほぼ同義であると述べている。また、阿部も「アクティブ・ラーニングは、内言の外言化という点で言語活動の充実の延長線上に位置づく」としている。

著者らは、コミュニケーション能力を育成する体育科授業研究を科研費の助成を受けて行っており、その成果を報告している。本研究課題は、この研究とも関係している。アクティブ・ラーニングが言語活動とほぼ同義であるとすれば、本研究課題は、この研究を発展させる研究であるとも言える。

いずれにしても、実技と知識の学習(体育理論)を関連・融合させることは、実技の授業を充実させることはもちろん、体育理論の授業が抱えている知識を智恵に高められていない点や時間不足で表面的な学習で終わっていた等の問題点を解決することに繋がると思われる。著者らはその際に、採るべき教育方法の一つがアクティブ・ラーニングであると捉えている。すなわち、実技の学習と知識の学習の授業を関連させながら形成させた課題を、実技と理論の授業で協働的に解決していく活動を仕組むことが一つの理想的な姿と考えている。

2. 研究の目的

本研究課題は、知識の学習と関連させたアクティブ・ラーニングを採用入れた実技の授業を提案することが目的である。そして、これを全運動領域に採用可能なモデルとして提案することが最終の目標である。換言すれば、「思考」「言語」「運動」の関係性を押さえた実技の授業において「内言・外言と運動」という新たな相互補完的意味づけを見出すことを企図し、子ども達の言語活動の充実と運動の習得を図り、豊かな体育授業を提案しようとするものである。

3. 研究の方法

(1)保健体育科におけるアクティブ・ラーニングの理論

アクティブ・ラーニングの意義や体育授業のモデルの考究: タイトルに「アクティブ・ラーニング」の語のある書籍の中から収集できた書籍14冊を対象に、「アクティブ・ラーニング」が求められる背景や意義、定義について整理した。

アクティブ・ラーニングに基づいた保健体育科授業モデルの作成: 上記結果を受けて、教科の特徴を踏まえた「アクティブ・ラーニング」による体育学習のモデルを考究した。

(2)アクティブ・ラーニングモデルによるマット運動学習プログラムの事例的研究 学びの「内化」と「外化」の視点から

対象: 宮崎県内T中学校1年生2クラスの計47名を対象とした。このうち1クラスを「アクティブ・ラーニング」による単元計画で実践するAL群(男子10,女子14)とした。他方のクラスは、授業担当者の従来の学習スタイルで授業を進めるNL群(男子10,女子13)とした。

学習グループの構成: NL群,AL群ともに、後述するスキルテストの得点, SST得点の合計得点の平均に大きな差が出ないように、3人ないし4人の男女別グループを編成した。

技能の測定及び評価方法: 単元前後に前転,壁倒立等を、ビデオカメラで前方と側方から撮影し、その出来栄を動作分析ソフト(MediaBland:DKH社製)を用いて分析した。

生徒による授業評価: 単元前後及び毎授業後に授業評価を行った。

抽出生徒の学習活動の記録

()**対象:** コミュニケーション能力と技能が学習活動に影響すると考えられたので、児童用ソーシャルスキル尺度(以下, SST とする。)の結果(上位,下位者)と単元前のスキルテストの結果(上位,下位者)の組み合わせから4つのタイプに該当する女子生徒を各1名ずつ抽出した。なお,抽出した4名の女生徒は typeA と D, typeB と C の生徒が同グループになるよう編成した。

()**グループ活動における学習活動の調査方法:** 抽出した両群の4名の対象者の活動と音声をビデオカメラとワイヤレスマイクを用いて録画,録音した。

()**学習活動の量的分析:** 対象者の発話数(会話の中で認められた文章数)と試技回数を測定し,学習活動を量的に分析した。

()**学習活動の質的分析:** 対象者の活動内容を記録するとともに,活動時の会話を文字起こした。また,学習プリントに書かれた記述内容も資料とし,技能的な発言や記述を中心に対象者の

活動、発言の変化を質的に捉えようとした。

(3)「アクティブ・ラーニング」によるマット運動の学習プログラムの有効性 小学校第3学年を対象として

対象：宮崎県内の小学校3年生を対象とし、NL群(35名)とAL群(35名)の2クラスを設定した。NL群は著者がこれまで行ってきた従来の学習スタイルで授業を進めたクラスである。一方、AL群は「アクティブ・ラーニング」による体育学習モデルに基づいたクラスである。

学習プログラムの作成：ALによる体育学習モデルに基づき、小学校3年生児童を対象にした6時間から成るマット運動学習プログラムを作成した。

技能の測定及び評価方法：単元前後でスキルテストを行い、単元を通じた技能の向上を測定した。その際、前転と後転をビデオカメラで側方から撮影し、ビデオ分析(動作分析ソフト<MedicalBland>:DKH社製)を行った。

児童による授業評価：単元前後において体育授業に対する診断的・総括的授業評価を行った。また、毎授業後には形成的評価を行った。

グループ活動での学習活動

()**対象：**単元前のスキルテストの結果(上位A・中位B・下位C)の組み合わせとSSTの結果(上位a・下位b)とで6つのタイプに該当する女子児童を各1名ずつ抽出した。

()**グループの構成：**NL群、AL群共に男女混合で3人ないし4人のグループを編成した。なお、グループ内のスキルテストの得点とSSTの得点の合計に大きな差が出ないようにした。

()**グループ活動における学習活動の調査：**抽出した各クラスの6名の対象者の学習活動の様子と音声をビデオカメラとワイヤレスマイクを用いて記録した。

()**学習活動の量的分析：**対象者の発話数と試技回数を量的に分析した。

()**学習活動の質的分析：**対象者の活動内容を記録するとともに、活動時の会話を文字起こしした。また、学習プリントに書かれた記述内容も対象とし、技能的な発言や記述を中心に対象者の活動、発言の変化を捉えようとした。

(4)「アクティブ・ラーニング」による保健体育科授業～中学生を対象としたバレーボールの実践を通して～

対象：宮崎県内K中学校1年生1クラス29名(男子9名、女子20名)を対象にした。

「アクティブ・ラーニング」による授業計画：バレーボール授業のプログラムを9時間で構成した。自分たちで課題を明らかにして、その解決策を考え話し合う活動を行うことで、チームとしての動きが高まるとともに、個人技能も高まっていくことを期待した授業計画である。

授業評価

()**技能面の学習成果の把握：**撮影したゲーム映像をもとに、各種評価法(平均触球回数など5種)を用い単元前後のゲーム様相の変化を把握した。また、単元前後に個人スキルテスト(オーバーハンドサークルパス回数など3種)の測定を行い、個人技能の変化を把握した。

()**情意・認識面の学習成果の把握**

形成的授業評価票を用いて毎授業後評価させ、診断基準に従って段階評価を行った。

(5)**体育理論と実技の授業を関連させることの意義：**知識の学習の代表である体育理論と実技の授業を関連させることの意義について述べられている文献や著書と、CiNiiでタイトルに「体育理論」が入っており、学習指導要領が告示された2007年以降の中学校を研究の対象とした論文2編の合計6資料を対象に、これらの資料で述べられている体育理論と実技の授業を関連させることの意義について整理・考究した。

(6)実技の授業を知識の学習と関連させた保健体育科授業学習プログラムの実践～陸上競技(長距離走)を通して～

対象：宮崎H中学校3年生88名(男子47名、女子41名)を対象とした。

全体プログラム：「体育理論」を1時間、「陸上競技」領域の「長距離走」単元を8時間(オリエンテーション1時間、実技6時間、振り返り1時間)、駅伝・ロードレース大会4時間の合計13時間で構成した。「体育理論」を実施するタイミングの適切性を検討するために1・2組をRU1・RU2群とし、長距離走の授業後に「体育理論」を行った。一方、3組をRS群とし、「体育理論」後に長距離走の授業を行った。

学習成果の測定

()**実技の授業(長距離走)と知識の授業の関連性：**プログラム終了後の生徒の感想を類型化し、実技の授業と知識の授業の関連性についてとらえ学習の深まりについて検討しようとした。

()**技能的評価：**事前に測定した1500m(男子)・1000m(女子)のペースで2700m(男子)・1800m(女子)を走った場合の基準タイムを、駅伝・ロードレース大会のタイムと比較した。

()**長距離走に対する愛好的態度：**プログラム実施前に「長距離走の授業は好きですか」、実施後に「長距離走の授業は楽しかったですか」というそれぞれの問いに対して四件法で回答させ、意識の変容を見ようとした。また、その理由について記述させたものを分類した。

()**診断的評価・総括的評価・形成的授業評価：**単元前後に高橋の「態度測定による体育の授業診断」を、毎授業後に形成的授業評価を実施した。

(7)実技と知識の学習を関連させた体育授業プログラム作成の試み～陸上競技(短距離走・リレー)における事例～

教育内容の措定：「短距離走・リレー」に内包されている知識を、関連書籍にあたり、体育理論や保健、他教科の内容との関連を考慮しながら、教育内容を措定しようとした。

実技と知識の学習を関連させた授業プログラムの提示：中学校 2 年を対象として、上記で検討した教育内容を意図的・計画的に学習できるプログラムを作成した。このプログラムは、実技の授業を中心に展開するが、生徒の興味・関心に基づく課題からスタートし、措定された体育理論に関する知識や保健、他教科の知識との関連性を押さえたものになるように作成した。

4. 研究成果

(1) 保健体育科におけるアクティブ・ラーニングの理論

「アクティブ・ラーニング」に関する書籍を対象に、その背景・意義や定義を考察するとともに「アクティブ・ラーニング」による体育学習プログラム作成のフレームを提案した。

受動的な講義形式から能動的で思考を活性化させる学習活動への変化「学びの質的転換」が「アクティブ・ラーニング」導入の背景と考えられた。

「アクティブ・ラーニング」とは、「教師主体の一方的な授業からの質的転換を図り、子どもの思考を重視し、新たな価値・創造性を生み出すような問題発見・解決のための学習活動をさせる問題解決学習や、他者との共有・協働等を通してコミュニケーション能力を育む協働学習を有効に相互展開させる教育方法である」と定義された。

「アクティブ・ラーニング」のとるべき具体的教育方法に、問題解決学習と協働学習が考えられ、それらを有機的に関連させることで、学びがより深まると考えられた。

体育科という教科の特徴を踏まえた「アクティブ・ラーニング」による体育学習モデルを作成した(図 1)。

上記モデルに基づき、「アクティブ・ラーニング」によるマット運動学習プログラム試案を作成した。

(2) アクティブ・ラーニングモデルによるマット運動学習プログラムの事例的研究 学びの「内化」と「外化」の視点から

本研究では上記で提案された「アクティブ・ラーニング」による体育学習プログラムを取り入れたマット運動の授業(AL 群)と、授業担当者の従来の授業スタイルで授業を実践(NL 群)し、種々の側面の学習成果を比較・検討した。

AL 群の生徒の技能点数の伸びは、NL 群よりも大きかった。

診断的・総括的授業評価における「できる」因子の得点の伸びは、AL 群の方が NL 群よりも大きかった。さらに、形成的授業評価においても単元が進むにつれて「成果得点」が向上した。

抽出した対象者の活動内容は、NL 群よりも AL 群の方が授業での発話回数に増加が認められた。一方、試技回数は NL 群の方が多いたことが認められた。

NL 群では、試技回数は多かったが、必ずしも技能の向上につながっていなかった。一方、AL 群の授業内での試技回数は NL 群よりも少ないが、グループ内で会話をしながら試技を行い、深い学びが生まれていると考えられた。

AL 群の生徒は、NL 群よりも友達に対する教え合い活動を多く行っていることが認められた。

AL 群では、単元を通して習得した知識や技能を他者に教える形で外化が多く行われていたと考えられた。

以上のことから、「アクティブ・ラーニング」による学習プログラムでのマット運動の授業は、担当教師の従来の授業よりも、「主体的、対話的で深い学び」を生むことが示唆された。すなわち、「主体的、対話的で深い学び」を実現しようと仕組まれた AL 群の授業は、「内化」と「外化」が往還関係で機能し、分かりを深めるとともに、技能面でも効果の得られることが認められた。

(3) 「アクティブ・ラーニング」によるマット運動の学習プログラムの有効性 小学校第 3 学年を対象として

本研究では「アクティブ・ラーニング」によるマット運動の授業と著者の従来の授業スタイルで授業実践、比較を行い、技能面や児童の学びの質にどのような差が出るのかを明らかにしようとした。その結果は、以下の点で明らかにされた。

スキルテストの結果(前転、後転)、AL 群の児童の点数の伸びは、NL 群の児童の点数の伸びよりも大きいことが示された。その背景には、単元を通して設定された「共通技(倒立系技)」による、腰角の増大が関係していると考えられた。

診断的・総括的授業評価を単元前後で比較すると、「よろこび」、「価値」因子の得点の伸びが AL 群の方が高値を示した。

形成的評価においても、単元が進むにつれて「協力」の項目で点数の向上が見られた。「学び」の項目も NL 群と比べて、増加傾向が見られた。

スキルテストと SST の結果を基にして抽出された対象者の活動時の発話を分析した結果、AL 群のグループ学習からは、多くの共感的な言葉が生まれ、それが内化と外化の重要な土台になっていることが示唆された。

以上のことから、「アクティブ・ラーニング」によるマット運動の学習プログラムを取り入れた単元においては、担当教師の従来の授業スタイルよりも、「主体的、対話的で深い学び」を促進させ、体育科に関する態度面や学習成果に効果的であったことが示された。

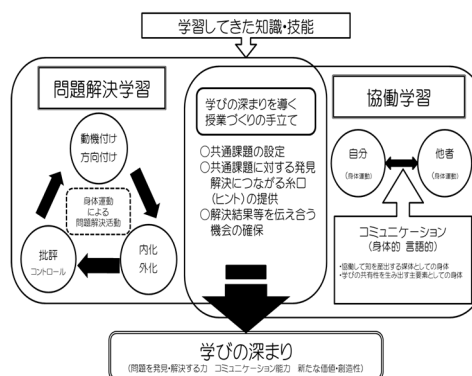


図1. アクティブラーニングによる体育学習モデル

(4)「アクティブ・ラーニング」による保健体育科授業～中学生を対象としたバレーボールの実践を通して～

本研究では「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れたバレーボールの授業を構想し、その成果を中学生を対象に検討した。すなわち、試しのゲームを経て課題形成を行い、生徒自らが課題解決の方法を検討し、課題解決を図るための活動を行う授業である。その結果、個人的基本技能を向上させ得た点、課題を解決する方法を検討する2・3時間目を設けたことで主体的に問題解決しようとする姿勢に繋がった点、全ての生徒が主体的に仲間と協力し思考を働かせながら授業に取り組むことができたと考えられた点等が成果として認められ、「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れた保健体育科学習は、運動についての基礎的な知識や技能の習得を図り、自ら学び新たに挑戦する力の育成を図るのに有用であると考えられた。

(5)体育理論と実技の授業を関連させることの意義

対象とした6つの文献を整理した結果、先人の考える、体育理論と実技の授業を関連させることの意義は、<運動やスポーツに関する知的リテラシーの習得>、<分かることの創造性>、<学び方の前提としての知識の重要性>、<主体的な参加を促すための知識>であった。この結果からは、体育理論と実技の授業を関連させることの意義として、知識の学習を実技と関連させて行うことで、技能や記録を向上させることができるだけでなく、「わかる」から「できる」へと成長していくことを生徒が実感することができることに大きな意義があると考えられた。

体育・スポーツが取り扱う内容は非常に多岐にわたる。したがって、ひとつの「分かり」が次の新しい「分かり(知識)」に繋がっていくところが、スポーツ文化の総合性を象徴しているとも言える。また、体育・スポーツは実技を伴う実践的な営みである。したがって、「できる」を目指して活動する点が特徴であるが、「できる」ことで新しい「分かり」が発見され、それが次の「できる」へ繋がっていくことも多い。一方、前述したように、何か「できる」ためには、学びの前提としての知識が重要なのである。すなわち、「分かる」ことは、次の新しい何かを生み出すことに繋がるのである。ここに、実技の授業と知識の学習を関連させることの意義があると考えられる。以上のことから、体育理論(知識の学習)と実技の授業を関連させることの意義は、「分かっていることの統合・往還」にあるとするのが妥当であると考えられた。

(6)実技の授業を知識の学習と関連させた保健体育科授業学習プログラムの実践～陸上競技(長距離走)を通して～

本研究では、実技の授業を「体育理論」に代表される知識の学習と関連させた保健体育科の学習プログラムを作成し、実践成果を検討した。その結果、以下の点が明らかにされた。

実技と体育理論の授業を関連させるタイミングは、実技の授業(長距離走と駅伝・ロードレース大会)の前に体育理論(「人々を結び付けるスポーツの文化的働き」)の授業を行った方が良いことが認められた。それは、インプットされた「知識」が実体験を通すことで質的に転化し「智慧」になったためであると考えられた。

スポーツイベントである「校内駅伝・ロードレース大会」に「支える」立場に関わることで、生徒たちが受動的でなく主体的に作り上げようとしたイベントにすることができた。このことは、保健体育教員だけでなく他教科の多くの職員の感想からも窺われた。

従来のペースのみを重視した長距離走の学習ではなく、「かけひき」にも着目させ「競走」を意識させたことで、多くの生徒の技能(タイム)を向上させ、長距離走の本質的な面白さに触れさせ得ることが認められた。その結果、長距離走を嫌いとしていた多くの生徒たちの意識を好意的に変容させ得た。

(7)実技と知識の学習を関連させた体育授業プログラム作成の試み～陸上競技(短距離走・リレー)における事例～

教育内容の措定:「短距離走・リレー」に内包されている知識を、体育理論や保健、他教科の内容との関連を考慮しながら、教育内容を措定した。その結果、「100m走の誕生」「走速度の構成要因(ピッチとストライド)」「短距離走のスタート法」「道具の進化」「世界記録の変遷」「オリンピック・パラリンピック」に関する知識が措定され、学習資料が作成された。

知識と実技の学習を関連させたプログラム

中学校2年生向けの「陸上競技(短距離走・リレー)」の学習プログラムを作成した。

第1クールでは、複数の短距離走を楽しませ、そこから生起される問題意識をもとに課題を形成させるようにした。おそらく、「速く走れるようになるにはどうすればよいか」という課題のもと、「スタート課題」や「最高速度課題」に意識が向くと予想され、これらの課題の解決に当たると設定した。その中で、クラウチングスタートや、ピッチとストライドという実技に関する知識と同時に、100m走の歴史や道具の進化なども配布資料を使って説明する。課題が解決された後は記録会を行い、解決された結果の有用性を確かめさせる。その際、体育理論の「スポーツを支える」内容にも繋がるように、役割を分担させ大会を運営させる。そのような活動と関連させて、追い風参考記録などに関係する知識にも触れさせる。

第2クールでは、短距離走の学習で学んだ「速く走るための知識」を応用させるとともに、新たな課題形成のために生徒の意識の流れに沿う形で「リレー」を楽しませる。リレーの本質は、「速さつなぎ」で、利得タイムの創出に運動課題があることから、ゴーマーク位置の発見や利得距離、曲走路の走り方などが実技に伴う知識として措定された。

しかし、本研究で作成したプログラムは実践されておらず、その有効性は、今後、多くの授業実践を通して検証していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 八塚真明, 日高正博, 後藤幸弘 | 4. 巻 28号 |
| 2. 論文標題 「アクティブ・ラーニング」による体育学習プログラム作成に向けての基礎的研究 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センターj研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 211-219 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 稲垣徳馬, 日高正博, 宇土昌志, 後藤幸弘 | 4. 巻 95号 |
| 2. 論文標題 実技と知識の学習を関連させた体育学習プログラム作成の試み～陸上競技(短距離走・リレー)における事例～ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 41-54 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 日高正博, 山崎努, 後藤幸弘, 長田天馬, 八塚真明 |
| 2. 発表標題 「アクティブ・ラーニング」によるマット運動の学習プログラムの有効性 - 小学校第3学年を対象として - |
| 3. 学会等名 日本教科教育学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 日高正博, 長田天馬, 八塚真明, 後藤幸弘 |
| 2. 発表標題 アクティブ・ラーニングモデルによるマット運動学習プログラムの事例的研究 - 学びの「内化」と「外化」の視点から - |
| 3. 学会等名 日本教科教育学会第44回全国大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 日高正博, 澤村忠俊, 後藤幸弘 |
| 2. 発表標題 アクティブ・ラーニングによる保健体育科授業～バレーボールの実践を通して～ |
| 3. 学会等名 日本教科教育学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 後藤 幸弘 (GOTO Yukihiro) (00047391) | 兵庫教育大学・学校教育研究科・名誉教授 (14503) | |